

タイ国SPF豚農場奮戦記：入場

名 越 仁 宣 (株サンエスブリーディング)

All about SWINE 42, 58-60

猛暑

とにかく暑い。今日は8月20日、先週は高知県四万十市で41℃という日本新記録が出た。

18年前の1995年、阪神淡路大震災が起きた後に私はタイ国へ向かった。タイでSPF豚農場を立ち上げるためだ。地下鉄サリン事件のことはタイのテレビ・ニュースで知った。

その頃、私が住んでいたカビンブリ地方は連日43℃前後の気温だった。

サバイ、サバーイ

日本の夏と違ってタイは湿度が低いとは言え、43℃はさすがにキツイ。タイ人から『ナゴシ、暑いか?』と聞かれれば、「everyday everytime everywhere」と、ぐったりした表情で答える。

面白かったのか、しょっちゅう聞かれていた。

しかし、木陰に入って風が吹いていると、それほど暑さは感じない、気持ちいい。

そんなときタイ人は『サバイ』と言う。気持ちいい、快適だ、楽だ、といった意味だ。

とても快適なときは『サバイ、サバーイ』、とサバイが増える。今、流行っている‘じえ’‘じえじえ’‘じえじえじえ’と同じだ。

休憩時間中、仕事をさぼっているとき、何もやることなくポケットとしているときにも、よくサバーイと言う。マイペンライ(大丈夫、問題ない)

とサバイがタイ人気質をよく表している。

物事を深く考えない連中だ。

入場規制

『ナゴシ、タイ人はシャワーを浴びて入場しないとと思うよ。』タイ人責任者のレワットが言う。

ほとんどの日本人なら決められた規則、ルールに従うと思うのだが、タイ人は他人が見ていないところでは手を抜く、楽な方を選択する、と言う。

『この新農場立ち上げのために、とくに優秀な人材を13人集めたが、そういう彼らでも他人が見ていない時はシャワーを浴びて入るかどうか』とレワットが真顔で言う。

シャワーインは、体表に付着した微生物を洗い落とすという役割の他にも、病原微生物を農場内へ持ち込まないという防疫意識を高める精神的な意味合いも大きい。

「ルールを決めただけじゃダメなのか。」

広大な敷地だが、コンクリートフェンスと有刺鉄線を外周に張り巡らした。

車両の入場口には守衛をおき監視する。

シャワーインにも何らかの物理的な方策が必要だった。

巨大水槽

『良い方法がある。』数日経ってからレワットが妙案を出してきた。

シャワー室内の中央を巨大な水槽で半分に仕切り、シャワー室内も外部と農場内に分ける。

巨大な水槽はパコマ約 2000 倍の希釈液を満たし深さ 1 m 40cm 程にする。透明なアクリル性のボードで巨大水槽の真ん中を完全に仕切り水中を潜らないと向こう側へ行けないように遮断する。仕切りの下部は 80cm ほど開けておき、そこを潜って外部側と場内側を行き来する。

頭の方から全身にパコマを浴びるので体中ぬるぬるとして気持ち悪いので、その後シャワーをしっかりと浴び全身を洗い流す、という方策だ。『へえ～、それなら絶対シャワーを浴びそうだね、つらそうだけど。』『やってみようよ、苦しうだけど。』『それは良い案だね、俺は入りたくないけど。』農場の幹部連中がそれぞれ口にする。

で、その通りにシャワー室を作った。

入場

シャワー室が完成し実践した。

室内の外部側で全裸になり、3 段ほどの階段を上がり巨大水槽の前へ。頭が天井に付くので腰をかめながら水槽に入る。想像以上にぬるぬるとしており水槽内で滑ってしまった。

巨大水槽とはいえ半分に仕切ったので、私の体格では狭い。大きく深呼吸をして息を吸い込み、身をよじって頭を水中に沈め、反転して頭から開いている仕切り下部を潜って通り向こう側へ行く。

想像以上に、つらかった。

潜るとき、ちょっと恐くて目を開けていたの

で、目が痛い。鼻粘膜や体にできた小さな傷もひりひりする。髪の毛からしたり落ちるパコマ希釈液が目に入るので、即座に全身シャワーを浴びる。

頭髪を中心に入念にシャワーを浴びて全身のぬるぬるを取る。成功だった。

これではシャワーを浴びざるを得ない。

その後、入場した場員達に各々感想を聞くと、『パコマ水の深さはナゴシに合わせたんだろ、俺は水槽に入った途端、鼻まで沈んだ。』と、場員からのクレーム。タイ人は一般的に小柄だ。

私は深い方が潜りやすいのだが、しぶしぶ、そのクレームを聞き入れて、もっと浅くした。

『パコマの刺激が強すぎる、もっと薄くしてくれ。』それは私も賛成で、もっと低濃度にした。

ひとまず、これで入場方法が決まった。

2～3回、パコマで溺れる夢を見たけど。

抜け道

最初はつらかったパコマの潜水も段々と慣れてきていた。浅めの水位でも苦もなく通り抜けるようになった。

そんなある日、いつものようにシャワーを浴びて入場する。天気は快晴だが風が吹いておりとても気持ちが良い朝だった。周りを見渡しているとシャワー室の端っこに小さなドアがあった。

こんな所にドアがあったっけ、と思いながら見ていると、そのドアから場員のギーがニコニコしながら入ってきた。『サバイ、サバーイ』と口にしてしている。私と目が合うと‘ギクッ’とした感じで立ち止まる。

「ギー、このドアは何だ。』『あ、ここから洗濯物や昼食や食べ物などを入れるんだ。』『お前もこ

こから出入りしてたんだろう。』『でも俺だけじゃないよ。他にも,,,'』と笑顔で答える。

「ちゃんと、パコマ水槽を潜って入って来い。」
『イエッサー』と言いながら慌てて入ってきたドアから戻っていった。

そのドアは封鎖して人が入れない程度の小窓にしたのは言うまでもない。

でも、私は、そういうタイ人気質は好きだし、うらやましいとさえ思っている。